

室として、持つことが出来た。今後毎月27日の夜、定期的にO、Bが顔をそろえ、海外の事、たゆまぬ目的達成に共々努力を払っていきたいと思っておる。そうして20周年を迎える頃には海外と交流を持ち、またまた全国の高校生が、関大に

探検部ありと、その門に列を作る事だろう。もう一度言う。本当に楽しくて仕方がない。これが私の現在の心境だ。

諸君大いに進もう。

たかおか・ただおみ(QB)

マスコミと探検

最近、『マス・コミに乗る』という言葉がめったやたらに使われるようになった。朝のなんとかモーニングショーで物価値上げを一席ぶつ主婦連のおばさんから『最近マス・コミに追いかけてまわされてね。困ってるんだ……』とまんざらでもなさそうな学者先生までさまざまだが、とにかくテレビ、週刊紙のはんらんから、一億総タレント化、の風潮さえみられるようだ。

『探検』も御同様で、各大学グループが競って目先の変った催し？をひっさげてマス・コミに登場してきている。なにか新聞、テレビの記事としての扱いでその行為を正当づけ、価格づけようとしている感じすらするのである。一例を紹介しよう。

××大学は秘境〇〇地域に学生だけの探検隊を派遣することになった。一行は9月上旬日本を出発、現地に2週間滞在、その間〇〇地方の最高峰M山に登るかたわら現住民の生活文化、言語、信仰などを調査する。

なお一行のうち4人はN川をゴムボートで下り沿岸各部落の調査にあたる……(略)。

これはある大学の探検隊派遣を扱った新聞記事だ。なるほど記事としては立派に通用するし、一

般読者をうなずかせるが、ちょっと事情を知っている者ならとんだお笑いの内容である。M山はアプローチが長く登頂に4日はかかり往復の日程を入れると山登りだけでも2週間では苦しいのが実情。調査などとてもする余裕はない。山岳部とフンダーホーゲル部で構成されているこのグループの名称が『××大学文化学術探検隊』なのだから恐れ入る——という次第だ。

他のグループでもこれに似たものが多く、『これならマス・コミが飛びつきそうだ』といううたい文句の考案にうつつをぬかしている感じすらするのである。

ついこの間もマス・コミをにぎあわしたある冒険ストーリーに神戸のある青年が大西洋、太平洋をヨットで横断した、というのがあった。これなどもある新聞社の後援つきで『手記にいくら』『航海中の記録写真にいくら』と現ナマが渡されていたという。これには真ばなしがうわさされており、無事大太平洋の荒波を乗り越えて房総沖についたとき、後援新聞社から『待った』がかかった。そのまま日本に上陸するとその新聞社が出している週刊紙の締め切りの関係から記事を独占できないというわけだ。そのため突如そのヨットは行方

不明になった。巡視艇が出動するやらなにやらで前景気は上々だったが皮肉なことに肝心のヨットが太平洋横断の疲れから本当に黒潮に流され、とうとう引航されて日本にたどりつく始末となってしまった。

新聞社からの待ったが、本当にあったのかどうかの真偽はわからないが、もしうわさ通りならその青年は自らの冒険の成功を演出された歓迎との引き換えにマス・コミに売ってしまったことになる。マス・コミに乗るつもりが、完全に乗られてしまったわけだ。さらにこのストーリーは二幕に続き、投下資本の巧率化をはかる新聞社側によってこの青年は二度演技を努めさせられることになる。横浜からヨットはトラックで大阪に運ばれ、大阪湾上で青年は再度ヨットに乗りこみ神戸港中突場に郷土の英雄として入港、再び紙面をかざることになっていたのである。崇高なアマチュア精神はどこへやら、こうなるともう完全なプロである。苦々しい思いをしたのは後援社以外の新聞の論調にもはっきりうかがえるようだった。

『大平洋ひとりぼっち』の堀江青年以来、ヨットによる冒険、探検は行きつくところに来てしまった感じだ。つきは何をもって現代の探検家たちはマス・コミに乗ろうというのだろうか？

探検とはある意味では精神的なもの、苦難を自己に課し、それをやりとげる純粹さ、未知にいどみ、それを知る喜び、といったものだと筆者は思っている。たとえ個人的行為であってもやりとげたあと、じっと喜びをかみしめるときの感激、そして後になっての思い出はなにものにもかえがたいものだろう。

わが関大探検部諸兄、『なんだつまらないこと』『遊びやないか』などの雑音に耳を貸すな。前述の××大学のグループが無事帰国後若干の装備とフィルムなどをもらったため後援新聞社にそれらしい文化的な？報告書を出しているのを見たとき筆者はむしろ気の毒な気がした。マス・コミは貧欲なまでに目新しいものを追い、英雄をつくりたがる。だがあきればボロボロのように捨てさる。われわれ学生探検はこんなマス・コミの非情を目から離れた、けだかい行為にしたいものである。

諸君の探検部員としての学生時代の思い出が数枚の新聞スクラップだけ、というのはさびしいかぎりではないか。『本当にやりたいことは何か』ももっとつきつめて考えてほしい——といまはマス・コミのメンを食う探検生 O. B は思うのである。

しげかね・わたる (O. B)

探検部 10 周年に想う

古 谷 精 宏

今から3年ほど前、昭和39年4月小生が主将という部の重責を荷なった頃、クラブ内は山岳パート(通称技術研究会)と離島パート(通称離島調査班)との二つが漠然と分れていた。新入生募

集をすまし、夏の一番長い活動時期を迎え、我々役員会は、はっきりと今後のパートの活動を重視し、尚かつ、探検部としての一つのまとまりを持つ意味で少々のわりはあったが1週間の全体合宿